
きっとこれが

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつとこれが

【Nコード】

N04370

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

第91回全国高校野球選手権の決勝、中京大中京高校と日本文理高校の試合の様子を、観客視点で描きました。

阪神電鉄甲子園駅を降りると、そこは、真夏の太陽を上回る、人々の熱気に溢れていた。

大林直樹の横で、小清水明海がうめいた。

「えーなにこれ？　すごい人。まだ2時間前だよー」

「いや、思ったより少ないんじゃないか」

「えーこれでーっ」

直樹は高校野球のファンである。マニアというレベルではなく、球場を包み込む熱気と応援、雰囲気が好きなのだ。お気に入りのCDは「ブラバン甲子園」である。

学生時代は、夏になると適当な日を見つけて、関東からはるばる甲子園球場まで足を運んでいた。見るのは大抵1回戦か2回戦だった。決勝や地元の強豪高、マスコミが注目する選手が出場する試合は、混みそうなので行ったことがなかった。はるばる甲子園球場に赴いて立ち見はごめんである。

社会人になってからも、その習慣は続いた。会社の休みはシフト制で、毎月どの日に休みが振り分けられるか分からないが、上記の理由から、観戦に困ることはなかった。

そして今年の休み。その一つは、決勝の予定日に割り振られていた。

それに気付いたのが、今年六月から付き合い始めた彼女の明海だった。

彼女は茶目つけ交じりに、直樹にこう言った。

「わたしを甲子園に連れてって」

「ねえ、どこに座るの？」

「まだバックネット裏が座れそうだし、そこに行こうか。屋根で日

陰になるし」

「……日陰賛成」

直樹たちはバックネット裏、やや三塁側よりの席に二人並んで座った。彼らの周りはほとんど人や座席取りの荷物で埋まっていた。まだ試合開始まで一時間半はある。

明海が、向かって右側、一塁側のスタンドを指差して言った。

「あっちのほうは空いているね」

「ああ、対戦カードからすれば、当然だろうね」

直樹は知ったかぶりを見せて、彼女に説明した。

決勝のカードは、新潟代表日本文理V S 愛知代表中京大中京である。一塁側は日本文理のスタンドだ。

中京大中京高校は、甲子園の常連で古豪と呼ばれる存在だ。優勝も何回かしていて、もちろん直樹も名前は知っている。日本文理高等学校は、ここ数年、甲子園出場を何回か果たしている強豪校だが、中京代中京に比べると、どうしても実績は劣る。

そんな知名度の差が観客の数となって表れているのだろう。

「愛知と新潟じゃあ、愛知の方が地元っぽいしね。それに、中京大の方には、プロも注目する……えっと何とかっていう選手がいるんだよ」

「あ、堂林くんでしょ。知ってる。テレビで見た。じゃあ私は、中京大のほう応援する」

「そうか。それじゃ僕は新潟のほうを応援するかな。一緒にやつまらないしね」

ちなみに、明海は神奈川出身、直樹は埼玉出身で、どちらも出場校とは関係なかった。ただ直樹の勤め先が、なにかと新潟に縁のある会社（社長が新潟出身）であることと、ひねくれ者の性格（いわゆる判官びいき）もあって、明海に関係なく、直樹は日本文理を応援することに決めていた。

時計の針が峠を越えた。直樹たちの席のあたりは甲子園の屋根の

おかげで日陰となっていて、それほど暑くはない。空も、青空も見えるが、厚く黒い雲も見え隠れして、どこか不気味な静けさを感じた。

「ねえねえ、見て。ほら、あっちとかそっち」

明海が指さした。

いつの間にか、空席の目立った1塁側も外野席も、びっしりと人で埋まっていた。

13時00分。プレイボールー

「やったーっ」

「……うそおん」

立ち上がって手をたたき明海の横で、直樹は座ったままつぶやいた。

先制したのは、中京大中京だった。

4番の堂林の一発、先制2ランだった。右打者である堂林の右中間への当たりが、そのまま伸びてスタンドに入った。高校生離れした一発だった。3塁側では、すでに勝利を確信したかのように、テンションが上がっている。

直樹は自嘲気味に言った。

「やっぱ堂林擁する中京大は強いなあ。一方的な展開にならなければいいけど」

「何言ってるの。試合前まで、知らなかったくせに」

明海が小突いた。

しかし、日本文理も決勝まで残ったチーム、けっして弱くはなかった。

「おーっ。よしよし。やるじゃんっ」

「あーあっ」

直後の二回の表。ノーアウトから、二本の二塁打であっさり、日本文理が一点を返した。ため息をつく明海の隣で、直樹は盛り上が

った。一点差。なお無死二塁。一気に同点・逆転のチャンスだ。だがここで、またも堂林が魅せた。今度は投手として。

「やたっ」

「いえーいつ」

「すごーい」

明海が大げさに手を叩く。

三者連続の空振り三振。ーさすがだった。

三回の表。日本文理の攻撃。簡単にツーアウトになって、二番打者が打席に入る。

この回は三人で攻撃終了かな、と直樹がぼんやりと思っていると、バットに当てた打球がよい角度で左翼に上がった。

「えっ、えっ、うそっ」

「……オーツ、入ったっ」

レフとスタンドぎりぎりへの本塁打。これで2ー2。日本文理が同点に追いついた。中京大中京に対し、堂々と渡り合っている。

「小さいのにやるなあ。高橋と言うのか、いやあ、きっと彼は打つよ」

したり顔の直樹を明海が白い目で見つめた。

「……打ってから言っても説得力無いよ」

けれど直樹のこの予感が、九回の、あの奇跡の始まりとなるのだった。

三回の裏。同点になったとはいえ中京大中京は強い。

エラー、四球、ヒットで、あつという間に満塁のチャンスを作る。

「いけいけーっ。あー、止まっちゃった」

「まあここは、無理に本塁に突入するより、走者をためる方が得策だよ」

一人アウトになって、二死満塁。カウント2-3。緊迫の場面。ピッチャーが投げたボールを打者が見送った。

「ボールっ」

「入ったっ」

明海と直樹が同時に声を上げる。

球審の手が上がった。ストライク。見逃しの三振だった。

明海が天を仰いだ。

四回表。日本文理の攻撃。ランナーを一人置いて、打席にはエースの伊藤。

振り切った一打は快音を残して、センターへ大きく飛んだ。

「お、これは大きいぞ!」

直樹は身を乗り出して打球の行方を追う。

中京大中京のセンターが下がる、下がる。そして走ったまま……

「捕ったあああっ」

明海が立ち上がって手をたたいた。ファインプレーだった。

大歓声が甲子園にこだまする。直樹も座ったまま手をたたいた。

明海が直樹を見下ろして、不服げに言った。

「なによ。応援しているのは、反対のチームでしょ」

「いいプレーは、チームなんて関係ないよ」

明海は隣に腰を下ろした。

「それもそうね」

五回表。日本文理の攻撃が三人で終わって、直樹は気づいた。

「あれ? もしかして、今のがはじめての三者凡退じゃないかな」

「え、そう?」

両軍ゼロ更新が続くが、毎回のように走者はでている。投手戦というよりは点を取りあぐねているような展開だった。だが、拙攻と表現するよりは、どちらも必死に一点を守りきっている、その印象のほづが強かった。

六回表。またもピンチをしのいだ日本文理が無死一、二塁のチャンスを作る。

「あ、堂林くん、代わっちゃったね」

ここで中京大中京のベンチが動いた。エースの堂林がマウンドを降り、ピッチャーが森本に代わったのだ。

一方、日本文理の伊藤はまだマウンドを守り続けている。プロが注目する投手に、投げ勝ったのだと思うと、少し胸が熱くなった。

「今日始めて、ピッチャーの名前知ったくせに」

「……はい。すみません」

明海のつつこみに、直樹は頭を下げた。

しかし、日本文理はチャンスを作るも本塁憤死。いい当たりもレフトフライ。この回も点を取ることができなかった。

「……なんか、やな予感がするな」

直樹の嫌な予感は、たいてい当たるものなのである。

六回裏。またしても中京大中京は満塁のチャンスを作った。打席に立ったのは、マウンドを降りて外野に回った堂林だった。気のせいか、バッターボックスに立つ彼の姿が、前の打席より大きく見えた。高校生とは思えない体格とスイング。

「ねえねえ、なんか雰囲気あるよね」

「あ、まあ……」

二人の予感は当たった。堂林がバットを振り切り、快音が甲子園に響く。強烈な打球は、あっという間に三遊間を抜けて行った。走者二人を還す、レフト前の二点タイムリーヒット。

ついに均衡が破られた。それも四番の一打で。こうなるとチームは勢いに乗るものだ。

「きゃーっ、きゃーっ。きゃああ」

明海が立て続けに騒ぎ立てる。

流れは完全に中京大中京。死球でまた満塁になると、続く打者が

初球を打って幸運な内野安打で一点追加。さらに次の打者も初球を打って、これが外野の真ん中を抜けた。走者一掃のタイムリィ。

「うわあ、やつぱ、強い」

中京大中京は、この回、一気に六点を加えたのだった。均衡した試合は一転、8 - 2と、大きく点差が開いた。

七回表。勝負あったと、あきらめムードの直樹を叱咤するかのような三連打で、日本文理が一点を取り返した。なお、無死一二塁のチャンス。

「よし、まだまだ分らないぞっ」

「さつきまで、僕も中京大中京を応援しようかなあ、なんて言っていたのにね」

明海が笑う。

「いやあ、記憶にございませんー。僕はもとと日本文理を・・・って、あーああっ」

「ざんねーん」

無死一二塁のチャンスは、内野ゴロで痛恨のダブルプレーもなつてしまった。

ランナーが三塁に残ったものも、次の打者が倒れて、スリーアウトチェンジ。得点はわずか一点止まりだった。

そして七回の裏。中京大中京は、奪われた一点を上まわる二点を取るのだった。

八回の表。日本文理はワイルドピッチで、一点を返した。

それでもこの時点で点差は、10 - 4である。

「うーん、せめて七回の二点があれば面白かったのに」

「四点差なら、満塁ホームランで同点だもんね」

結局この回の攻撃も一点取って終了した。

その裏。日本文理の伊藤が、甲子園最後のマウンドになるだろう回を、無失点で切り抜けた。

そしてついに、試合は最終回に入った。

「あれ、ピッチャーが代わっちゃうよ」

「ああ、良くあることだよ」

九回。中京大中京の投手が、森本から、再び堂林へと代わった。六點差。優勝を決めるマウンドに、エースを立てさせてあげたいという、監督の親心だろう。

「へー。監督もそんなこと考えるんだあ」

「まあ、勝ちを確信しているみたいで、あんまり好きじゃないけどね」

もつとも、中京大中京の優勝を確信しているのは、甲子園球場に詰め掛けた大多数の観客も同様だった。

見逃しの三振。内野ゴロ。

あつという間にツーアウトとなる。

「あつとひとり！ あつとひとりっ」

球場の声援に合わせて彼女も手をたたく。

一方一塁側では、最後の応援がされている。

チャー、チャラー、チャラ、チャラー

シンプルな演奏に合わせ、悲壮な声で打者の名を叫ぶ。

不謹慎かもしれないが、この一瞬が直樹は好きだった。

日本文理の打順は一番に戻った。打席には、彼女が面白い名前ね、と失礼なことを言った、切手。

「あとアウト一つで、試合終了だね」

「……うん。でも彼が出塁したら、まだ分からないよ」

なんとなく、確信に近いものがあつた。彼が出塁すれば、あの、直樹一押し、二番高橋だ。あれからも一本ヒットを打っているし、彼に回れば、一点ぐらいは返してくれるに違いない、そう思っていた。

そして――

「うしっ」

粘った末、四球で切手が出塁した。

打席に高橋が入る。そして、打った。

強烈な本塁打性の当たり。これは惜しくも左に切れる。

「あーあ、惜しかったねえ」

彼女が勝者の余裕を見せるけど、直樹としては攻撃が途切れる本塁打より、ヒットを望んでいた。

だが、あの当たりで確信した。大丈夫。彼なら打ってくれる。

ツーストライクと追い込まれながらもファールで粘った九球目。

鮮やかな打球は左中間を真つ二つに割った。

「よし、よし、よしっ」

盗塁を決めていた切手が悠々本塁に還った。これで、最低限の意地は見せてくれた。

「一点取ったね。でも次の左の人、ヒット打っていない気がする」

「……実は、そうなんだよなあ」

ここで終わってしまうのか。ツーストライクと追い込まれる。直樹は気がでない。際どい球を見送った。ボールの判定に、球場に安堵とため息がこだまする。

依然としてツーストライク。それでも粘る。ファール、ファール

……

「もう。じらさないで早く終わればいいのに」

そう言いつつも、明海はぎゅっと手を握りしめ、じっと打席を見つめている。

何球目だっただろうか。快音が響いた。

振り切った打球はライトの右を抜ける鮮やかな三塁打となった。

高橋が還って、これで、10 - 6・四点差！

「……それでもまだ四点差かあ」

続くバッターは、四番打者。

けれど、打ち上げてしまった。三塁方向のフライ。

球場に歓声とため息がこだまする。けれど直樹は三塁手の異変に気づく。

「……あれ？　もしかして」

「えっ、えっ？」

白球が、彼の背中にぼとりと落ちた。ファール。

「あああーっ。なんでええ」

「三塁手、一瞬ランナーを見ただろ。もしかすると、あれで目が切れてボールを見失ったのかもしれないな」

もちろん守備妨害というレベルではなかった。だが優勝を決める場面、緊張はピークに達しているのだろう。

それにしても、落とした時の反応は、ため息より歓声の方が多かった。直樹同様、球場の観客は、まだ幕が閉じるには早いと思っ
ているに違いない。

このファールで気落ちしたわけではないだろうが、

「あ、危ない」

明海の悲鳴むなしく、投じた一球は打者にぶつかった。

死球である。ここでピッチャーが再び森本に戻った。

「ま、そんなに優勝は甘くないってことだな」

「でも、どっちかあと一人でおしまいだよね」

次の打者も、ツーストライクから粘る。何度目かのファールのと
き、直樹は思った。

「なあ。もしあと一人出て、満塁になったら、ホームランで同点だ
よな？」

「やだあ、なんか素人っぽい考え方だよ」

明海が笑う。

「でも事実だろ」

「うん。まあ」

チャー、チャララー、チャラ、チャラー

九回二死からずっと日本文理の同じ応援が続いている。もう何分
たっただろうか。

森本が根負けしたかのように、フォアボールを出した。ついに全
ての塁が埋まった。

「……ほんとに、満塁になっちゃったよ」

この場面で打席に向かうのは、ずっと甲子園のマウンドを守り続けてきたエースの伊藤。

なんともドラマになるシーンだと思ったのは、直樹だけではなかった。球場に響き渡る、「伊藤コール」。

試合開始直後は中京大を応援していた一般の観客たちも、今は心を一つにして、打席に立つ伊藤を応援している。

「すごい、すごいっ」

明海が球場を見渡してはしゃぐ。ボールのたびに湧きおこる歓声。もう試合は、どっちが勝っているのか分からなくなっていた。

伊藤が打った。叩きつけられた打球は、大きく空いている三遊間を、破った。

「きやああっああ」

明海が悲鳴とも歓声ともつかない声で絶叫する。三塁ランナーが還ってまず一点。さらに二塁ランナーも本塁を目指す――

「あっ――馬鹿……っ」

本塁でのクロスプレー。タイミングは微妙。審判が手を広げた。セーフ。さらに大きな歓声が響き渡る。

「ふう。審判も分かっているよな」

ここでアウトにしてしまったら、せっかくの試合が尻切れトンボで終わってしまうところだった。

そんな口調でつぶやいたら、珍しく明海が怒った様子で言った。

「何ってるの。ちゃんとセーフだったよ。こっ、横から手を伸ばして、タッチより早くベースに……」

明海の視力は直樹よりずっと良い。彼女がそう言うなら間違いないだろう。

「そっか。変なこと言って、悪かった」

「分かればよろしい」

「にしても審判も凄いよな。炎天下のこういう試合で正確なジャッジを出すんだから」

そんな会話をしている、日本文理が代打を出したことに気付かなかった。試合に集中——と思った矢先の初球を打った。歓声がさらに書きされる。またもレフト前へのヒット。一点が入る。レフトが処理をもたつく。その隙に一塁の伊藤は三塁まで達した。

「……ついに」

「一点差……！」

代走が送られた。走者は一三塁。代走の彼が還れば、なんと逆転である。

投手は代わらない。森本が続投。

ボール。大歓声が起こる。流れは完全に日本文理に向いていた。

そして、快音が響いた。

「あつ——！」

目で追った、強烈な勢いの白球は、三塁手の所で消えた。つい直前まで沸き上がっていた球場が一瞬静まり返る。

三塁手が、白球の収まったグローブと右手を小さく持ち上げた。

打者はそれを見てグラウンドに崩れ落ち、マウンドの投手はガッツポーズを見せた。

——この瞬間、優勝校が決定した。

10対9。

この試合結果は、両チームの選手を満足させただろうか？

準優勝と優勝の差は大きい。日本文理の選手は、今は満足している、数年後、十数年後になってみて、やっぱり勝ちたかったと思うかもしれない。

かと言って、日本文理が優勝したら、中京大中京の選手、フライを取れなかった三塁手、九回に出てきて打たれた堂林、接戦であと一点がとれなかった選手たち。彼らは一生後悔することになっていくかもしれない。

結局、勝負である以上、勝者と敗者は存在する。

けれど――

隣で感動の涙を流している明海を見て、直樹は思った。
きっとこれが最良の結果だったんだ、と。

「ねえ、ヒーローインタビューだって。行ってみようよ」
涙を拭いて明海が言った。

余談だが、直樹と明海は、このインタビューにもまた感動させられるのであった。

（後書き）

この作品は、自分の記憶とユーチューブの動画、スポーツナビの記事を参考にして書きました。間違いがございましたら、ご指摘ください。

なお、選手名につきましたは、全員の名前を記すとコラム風になってしまったので、観戦当時の私が把握していた選手を中心に記載するという形を取らせていただきました。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0437o/>

きっとこれが

2010年10月8日13時46分発行